

Title	新カリキュラムにおける体育実技履修学生の運動活動に関する調査
Sub Title	The investigation about exercise participation of students took sports class in the new curriculum.
Author	村山, 光義(Murayama, Mitsuyoshi) 田中, 伸明(Tanaka, Nobuaki) 石手, 靖(Ishide, Yasushi)
Publisher	慶應義塾大学体育研究所
Publication year	1997
Jtitle	体育研究所紀要 (Bulletin of the institute of physical education, Keio university). Vol.36, No.1 (1997. 3) ,p.59- 66
JaLC DOI	
Abstract	We made an investigation on exercise participation of students who took sports class in the new curriculum in Keio University. The students were 1327 males and 393 females and they answered the questionnaire. The percentage of students taking exercise at present and having experience in high-school in this study were higher than the former study (Murayama and Tanaka, 1995). However, the percentage of exercise participation decreased from first grade to second grade (male: 8.3%, female: 9.8%). The motive of exercise participation or the reason of selecting sports and taking sports class differed among male and female. In male, many students have intention of aiming competition or improving sports skill. On the other hand, female's intention of taking exercise was recreation. Then, the main purpose of taking sports class for students having no exercise except sports class was also different from students of having exercise in daily life. Namely, the improvement of physical fitness and lack of exercise were reasons of taking sports class for them. These results suggest that the sports class of future in the University should be arranged the various courses toward physical fitness, competition, recreation and the like.
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00135710-00360001-0059

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

新カリキュラムにおける体育実技履修学生の 運動活動に関する調査

村 山 光 義* 田 中 伸 明* 石 手 靖**

The investigation about exercise participation of students
taked sports class in the new curriculum.

Mitsuyoshi Murayama¹, Nobuaki Tanaka¹, Yasushi Ishide²

Abstract

We made an investigation on exercise participation of students who taked sports class in the new curriculum in Keio University. The students were 1327 males and 393 females and they answered the questionnaire. The percentage of students taking exercise at present and having experience in high-school in this study were higher than the former study (Murayama and Tanaka, 1995). However, the percentage of exercise participation decreased from first grade to second grade (male: 8.3%, female: 9.8%). The motive of exercise participation or the reason of selecting sports and taking sports class differed among male and female. In male, many students have intention of aiming competition or improving sports skill. On the other hand, female's intention of taking exercise was recreation. Then, the main purpose of taking sports class for students having no exercise except sports class was also different from students of having exercise in daily life. Namely, the improvement of physical fitness and lack of exercise were reasons of taking sports class for them. These results suggest that the sports class of future in the University should be arranged the various courses toward physical fitness, competition, recreation and the like.

目 的

大学設置基準の改正後、慶應義塾大学（以下本塾と略す）においても保健体育科目のカリキュラム改訂が行われ、1996年度には授業の履修形態が、環境情報学部、総合政策学部を除いて全面的に必修科目から選択科目へ移行した。そのため、今後、体育実技を履修しない学生も多数となり、そのまま卒業を迎えていくこととなる。この点から、新しい大学体育の在り方が問われてきている。筆者らはこうした科目改革のための基礎資料として、本塾の必修体育時の資料を元に、本塾学生の体力標準値¹⁾、運動経験・実施の実態²⁾について報告し、選択移行後において積極的な比較調査による学生の運動実施や体力レベル等の実態把握が重要なことを指摘してきている。本研究は、保健体育科目のカリキュラム改訂後の履修学生を対象に、運動実施状況等をアンケート調査し、必修時の報告データ²⁾との違いについて検討を加え、今後の体育実技展開の基礎資料とすることを目的とした。

*慶應義塾大学体育研究所助手

**慶應義塾大学体育研究所専任講師

¹Assistant of the Institute of Physical Education, Keio University.

²Assistant proffessor of the Institute of Physical Education, Keio University.

方 法

保健体育科目のカリキュラム改訂後における本塾学生の運動活動の実態を知るため、体育実技履修者を対象としてアンケート調査を実施した。調査時期は1996年1月であり、授業の中で配布し記入させ、回収した。

アンケートにおける質問項目は以下のものであった。括弧内には選択肢を示した。

- 高等学校時における運動経験の有無（学内あり、学外あり、なし）、種目（村山と田中²⁾と同様）、形態（運動部、地域クラブ、遊び）、頻度（週7～1回、月2～1回）。
- 大学1～4年時における運動実施の有無（学内あり、学外あり、なし）、種目（村山と田中²⁾と同様）、形態（サークル、地域クラブ、体育会）、頻度（週7～1、月2～1）。各年時毎すべて記入。
- 体育実技以外での運動実施の動機（種目の成績・技術の向上、運動不足解消、健康・体力の増進、実施仲間の人間関係の楽しさ）。
- 実施種目の選択理由（その種目をさらにやりたい、経験はないが興味があった、友達と一緒にだったので、楽しそうだったので）。
- 非運動実施者の理由または実施のための条件（自由記述）。
- 体育実技履修の動機（運動が好きだから、種目の技量・技術をアップしたい、単位がほしいから、教職課程に必要なだから、体力の維持・健康増進をしたい、友達と一緒に楽しみたい）。この項目のみ複数回答可とした。

アンケートの回答数は表1に示す通り、男子1345名、女子402名であった。しかしながら、3・4年生の回答が極端に少ないため、分析に当たっては1・2年生のみ（1年 1327名、2年 393名）を対象とした。

表1 アンケート回答数（人）

学 年	男 子	女 子
1	921	291
2	406	102
3	16	6
4	2	3
計	1,345	402

結 果

1. 高等学校における運動経験について

表2は高等学校での運動経験の有無についてその比率を示したものである。男女いずれも学年間の比率に大きな差はなく、合計で男子69.3%、女子57.8%に運動経験があった。また表3は実施の形態と頻度について示した。男女ともほとんどが運動部で実施し、頻度は男子で週6回、女子で週3回が最も多かった。

新カリキュラムにおける体育実技履修学生の運動活動に関する調査

表 2 高等学校運動経験の有無

		1 年 生		2 年 生		計	
		人 数	%	人 数	%	人 数	%
男 子	学内あり	553	60.0	249	61.3	802	60.4
	学外あり	92	10.0	26	6.4	118	8.9
	なし	276	30.0	131	32.3	407	30.7
	計	921	100.0	406	100.0	1,327	100.0
女 子	学内あり	142	48.8	47	46.1	189	48.1
	学外あり	29	10.0	9	8.8	38	9.7
	なし	120	41.2	46	45.1	166	42.2
	計	291	100.0	102	100.0	393	100.0

表 3 高等学校運動経験の形態と頻度

実施形態	男 子		女 子	
	人 数	%	人 数	%
運 動 部	772	84.6	168	75.0
地域クラブ	36	3.9	18	8.0
遊 び	77	8.4	18	8.0
そ の 他	28	3.1	20	8.9
計	913	100.0	224	100.0

実施頻度	男 子		女 子	
	人 数	%	人 数	%
週 7 回	108	11.8	11	4.9
週 6 回	299	32.7	32	14.3
週 5 回	172	18.8	38	17.0
週 4 回	81	8.9	33	14.7
週 3 回	120	13.1	41	18.3
週 2 回	60	6.6	27	12.1
週 1 回	40	4.4	32	14.3
月 2 回	15	1.6	8	3.6
月 1 回	18	2.0	2	0.9
計	913	100.0	224	100.0

2. 大学入学後の運動実施について

方法に示したとおり、分析は1・2年生を対象としたため、大学1年時、2年時の運動実施についての結果である。

表4は大学での運動実施の有無について学年別及び年時別にその比率を示したものである。1年時の運動実施は学内・学外を合わせて男子68.5％、女子60.8％と高等学校での運動経験に類似した比率を示した。また、女子における1・

表 4 大学での運動活動の有無（1年時及び2年時）

		1 年 時 の 授 業 以 外 の 活 動				1 年 時 合 計		2 年 時 (2 年 生)	
		1 年 生		2 年 生		計		計	
		人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%
男 子	学内あり	567	61.6	239	58.9	806	60.7	203	50.0
	学外あり	63	6.8	41	10.1	104	7.8	42	10.3
	なし	291	31.6	126	31.0	417	31.4	161	39.7
	計	921	100.0	406	100.0	1327	100.0	406	100.0
女 子	学内あり	172	59.1	51	50.0	223	56.7	42	41.2
	学外あり	12	4.1	4	3.9	16	4.1	10	9.8
	なし	107	36.8	47	46.1	154	39.2	50	49.0
	計	291	100.0	102	100.0	393	100.0	102	100.0

新カリキュラムにおける体育実技履修学生の運動活動に関する調査

2年生の比較において、運動実施なしの比率が2年生で10％程度高かった。一方、2年時の運動実施は、1年時に比較して男女とも学内実施の比率が減少した。学外実施がわずかに増加したものの、実施なしが男子で39.7％、女子で49.0％と増加し、2年時になると運動を実施しない比率が10％程度高くなった。

表5は大学での運動実施の形態と頻度について示したものである。実施の形態は、男女ともサークルが圧倒的に多かった。実施頻度には男女で違いがあった。すなわち、男子では週2回が最も多く、2年時には週3回の比率も増加していたのに対し、女子では週1回が最も多く、2年時には週2回の比率が下がり、月1回が増加していた。比較すれば、男子の方が女子よりは実施頻度が高い傾向にあった。

表5 大学での運動活動の形態と頻度（1年時と2年時の比較）

実 施 形 態	男 子				女 子			
	1 年 時		2 年 時		1 年 時		2 年 時	
	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%
サ ー ク ル	730	83.0	187	81.7	195	84.4	37	53.6
地 域 ク ラ ブ	34	3.9	10	4.4	4	1.7	2	2.9
体 育 会	45	5.1	6	2.6	13	5.6	4	5.8
そ の 他	71	8.1	26	11.4	19	8.2	26	37.7
計	880	100.0	229	100.0	231	100.0	69	100.0

実 施 形 態	男 子				女 子			
	1 年 時		2 年 時		1 年 時		2 年 時	
	人 数	%	人 数	%	人 数	%	人 数	%
週 7 回	9	1.0	1	0.4	3	1.3	0	0.0
週 6 回	26	3.0	4	1.8	6	2.6	2	4.2
週 5 回	43	4.9	13	5.7	7	3.0	1	2.1
週 4 回	34	3.9	8	3.5	11	4.7	1	2.1
週 3 回	146	16.7	46	20.3	21	9.0	7	14.6
週 2 回	266	30.4	76	33.5	64	27.5	6	12.5
週 1 回	238	27.2	41	18.1	78	33.5	17	35.4
月 2 回	54	6.2	15	6.6	17	7.3	3	6.3
月 1 回	60	6.8	23	10.1	26	11.2	11	22.9
計	876	100.0	227	100.0	233	100.0	48	100.0

3. 体育実技以外での運動実施の動機と種目選択について

表6は授業以外での運動実施の動機について示したものである。男子においては「種目の成績・技術向上」が32.9％、「運動不足解消」が30.2％と同程度であった。女子においては、「運動不足解消」が39.1％を占め、「仲間の人間関係」が27.7％と「種目の成績・技術向上」の21.3％を上回り、男子との違いが示された。

表7は実施種目を選んだ理由について示したものである。男子では、「その種目をさらに伸ばす」が45.1％と高かった。女子では「楽しそうだったから」が34.2％、「経験はないが種目に興味があった」33.2％「その種目をさらに伸ばす」31.2％とほぼ同程度に比率が分かれた。

一方、運動を実施していない者のその理由または実施のための条件について自由記述で回答を求めた結果では、「時間がない」176名、「（自由に使える）場所がない」60名、「機会がない」29名が主な多数意見であった。

表 6 授業以外に運動する動機（男女別）

	実 施 形 態	1 年 生		2 年 生		総 計	
		人 数	%	人 数	%	人 数	%
男 子	種目の成績・技術向上	189	33.2	78	32.1	267	32.9
	運 動 不 足 解 消	163	28.6	82	33.7	245	30.2
	健康・体力の維持増進	89	15.6	34	14.0	123	15.1
	仲 間 の 人 間 関 係	128	22.5	49	20.2	177	21.8
	計	569	100	243	100	812	100.0
女 子	種目の成績・技術向上	36	22.2	7	17.5	43	21.3
	運 動 不 足 解 消	60	37.0	19	47.5	79	39.1
	健康・体力の維持増進	21	13.0	3	7.5	24	11.9
	仲 間 の 人 間 関 係	45	27.8	11	27.5	56	27.7
	計	162	100	40	100	202	100.0

表 7 運動種目選択の理由（男女別）

	選 択 項 目	1 年 生		2 年 生		総 計	
		人 数	%	人 数	%	人 数	%
男 子	その種目をさらに伸ばす	280	48.2	97	38.0	377	45.1
	経験はないが興味があった	143	24.6	72	28.2	215	26.5
	友達と一緒にだったから	16	2.8	18	7.1	34	4.2
	楽しそうだったから	142	24.4	68	26.7	210	25.9
	計	581	100	255	100	836	101.6
女 子	その種目をさらに伸ばす	51	31.3	12	30.8	63	31.2
	経験はないが興味があった	58	35.6	9	23.1	67	33.2
	友達と一緒にだったから	3	1.8	0	0.0	3	1.5
	楽しそうだったから	51	31.3	18	46.2	69	34.2
	計	163	100	39	100	202	100.0

4. 体育実技履修の動機について

表 8 は体育実技履修の動機について学年、男女、さらに運動実施の有無で分けた各群別にまとめたものである。どの群においても「運動が好きだから」「体力の維持増進」「単位がほしい」の回答率が高かったが、その順序には群間で違いがみられた。1, 2 年合計において比較すると、運動実施（学内・学外）では「運動が好きだから」が男女とも 50% を大きく越えていたのに対し、運動実施なしでは「運動が好きだから」と「体力の維持増進」の比率が近づき、それぞれ男子 42.3%, 38.3%, 女子 34.8%, 49.0% といずれも 50% を越える回答ではなかった。また、運動実施なしの特徴としては「種目の技量・技術向上」の比率が男女とも 12% 前後と運動実施群に比べ低かった。また、女子の実施なしにおいて「教職課程に必要」が 17% と比較的多かった。さらに女子全体の特徴として、「友達と一緒に楽しみたい」が 12% 前後と男子に比較して多かった。総じて、運動実施者は運動への意欲で体育実技を履修するのに対し、実施していない者は体力の向上といった目的も加わり、さらに女子では履修動機が多様化していた。

表 8 体育実技履修の理由（複数回答可）

男 子

	1 年 生			2 年 生			1 , 2 年 生 合 計		
	学 内	学 外	な し	学 内	学 外	な し	学 内	学 外	な し
運 動 が 好 き だ か ら	359	45	116	152	28	61	511	73	177
種目の技量・技術向上	84	18	38	47	10	13	131	28	51
単 位 が 欲 し い	130	29	96	49	10	25	179	39	121
教 職 課 程 に 必 要	27	6	29	3	0	4	30	6	33
体 力 の 維 持 増 進	119	17	104	69	12	56	188	29	160
友 達 と 一 緒 に 楽 し み た い	33	4	21	20	1	15	53	5	36
そ の 他	19	0	15	5	0	1	24	0	16
延 数	771	119	419	345	61	175	1,116	180	594
実 施 群 実 数	567	63	292	239	41	126	806	104	418

実数当りの比率 (%)	1 年 生			2 年 生			1 , 2 年 生 合 計		
	学 内	学 外	な し	学 内	学 外	な し	学 内	学 外	な し
運 動 が 好 き だ か ら	63.3	71.4	39.7	63.6	68.3	48.4	63.4	70.2	42.3
種目の技量・技術向上	14.8	28.6	13.0	19.7	24.4	10.3	16.3	26.9	12.2
単 位 が 欲 し い	22.9	46.0	32.9	20.5	24.4	19.8	22.2	37.5	28.9
教 職 課 程 に 必 要	4.8	9.5	9.9	1.3	0.0	3.2	3.7	5.8	7.9
体 力 の 維 持 増 進	21.0	27.0	35.6	28.9	29.3	44.4	23.3	27.9	38.3
友 達 と 一 緒 に 楽 し み た い	5.8	6.3	7.2	8.4	2.4	11.9	6.6	4.8	8.6
そ の 他	3.4	0.0	5.1	2.1	0.0	0.8	3.0	0.0	3.8

女 子

	1 年 生			2 年 生			1 , 2 年 生 合 計		
	学 内	学 外	な し	学 内	学 外	な し	学 内	学 外	な し
運 動 が 好 き だ か ら	91	10	39	31	2	15	122	12	54
種目の技量・技術向上	31	3	13	15	1	5	46	4	18
単 位 が 欲 し い	47	2	22	8	1	9	55	3	31
教 職 課 程 に 必 要	22	1	24	0	1	3	22	2	27
体 力 の 維 持 増 進	63	5	45	24	0	31	87	5	76
友 達 と 一 緒 に 楽 し み た い	22	2	14	4	0	7	26	2	21
そ の 他	7	0	7	1	0	1	8	0	8
延 数	283	23	164	83	5	71	366	28	235
実 施 群 実 数	172	12	108	51	4	47	223	16	155

実数当りの比率 (%)	1 年 生			2 年 生			1 , 2 年 生 合 計		
	学 内	学 外	な し	学 内	学 外	な し	学 内	学 外	な し
運 動 が 好 き だ か ら	52.9	83.3	36.1	60.8	50.0	31.9	54.7	75.0	34.8
種目の技量・技術向上	18.0	25.0	12.0	29.4	25.0	10.6	20.6	25.0	11.6
単 位 が 欲 し い	27.3	16.7	20.4	15.7	25.0	19.1	24.7	18.8	20.0
教 職 課 程 に 必 要	12.8	8.3	22.2	0.0	25.0	6.4	9.9	12.5	17.4
体 力 の 維 持 増 進	36.6	41.7	41.7	47.1	0.0	66.0	39.0	31.3	49.0
友 達 と 一 緒 に 楽 し み た い	12.8	16.7	13.0	7.8	0.0	14.9	11.7	12.5	13.5
そ の 他	4.1	0.0	6.5	2.0	0.0	2.1	3.6	0.0	5.2

考 察

1. 必修体育時の資料との比較

村山と田中²⁾は本塾学生の運動経験・実施状況について必修体育時の資料に基づいて報告した。これは、入学生全体が対象とされ、1年生のみのデータであった。一方、本研究は、カリキュラム改訂後の履修者が対象で、2年生のデータが加わっている。また、調査年度には、ほとんどの学部が選択科目となり、理工学部のみ2単位必修となっていたが、その履修形態も、1, 2年時いずれかの幅があり、かつ学生は授業内容を40数種目から自由に選択できるといったカリキュラム改訂以前の必修形態に比較し大幅に改善されたものであった。こうした、新カリキュラムでの履修者の運動実施の実態についてその特徴を知ることが本研究の目的であった。そこで、必修時の資料との比較を行った。

まず、高等学校運動経験に関して比較する。本研究の結果では、学内と学外を合わせて男子69.3%, 女子57.8%が運動経験があった。必修時の資料はそれぞれ62.0%, 46.8%で、本結果の方が約10%程度高い。また、実施の頻度は男子週6回、女子週3回がもっとも多く、必修時のデータと同様であった。従って、選択化以後の履修者は運動経験者が比較的多かったことが推察される。

続いて、1年時運動実施の比率を必修時と比較すると、男子では実施が学内、学外合わせて68.5%と必修時の55.2%に比較して高かったのに対し、女子では60.8%と59.8%で差がなかった。つまり、男子の体育実技履修者においては運動実施率が高く、一方女子ではそうではなく、履修者と非履修者間で運動実施率には差がないと考えられる。しかし、今回新たに調査した2年時の運動実施比率は、男女とも10%程度低下し、運動継続には多少の障害があるようである。非運動実施者の理由には「場所がない」といったものもあり、運動施設の少ない三田キャンパスへ拠点が移動する3・4年では運動実施の動向はさらに悪化することも予想される。

以上、必修時の資料との比較から、カリキュラム改訂後の体育実技履修者の運動実施の特徴についてまとめると、未履修者に比較して運動経験者の比率が高く、男子では運動実施比率も高いといえる。また、女子は学生数も男子に比べて少ないため、今後さらにデータ数を重ねる必要があるが、運動実施比率は低くなかった。つまり、カリキュラム改訂後、必修時よりも運動に対する欲求が高い学生が選択し、逆にいえば、運動経験がない学生や、運動を実施していない学生との距離は一層広がっていている可能性が指摘できる。また、2年時には実技履修者であっても運動実施の比率は低下した。日常的な運動の減少を招く学生を増加させないために、こうした、運動を指向しない学生、体育実技を履修しない学生、運動を継続できない学生へのアプローチが依然大きな課題であり、教育カリキュラムを越えた対策が必要であろう。

2. 運動実施の目的と体育実技の役割について

運動実施の形態と頻度の結果(表5)ではサークル活動が圧倒的多数を占め、実施頻度は男子で週2回、女子で週1回と高等学校での実施頻度からは大幅に減少している。さらに、表4に示したように、実施の比率は2年時において1年時よりも男女とも10%程度下がり、運動実施の内容は十分とはいえない。従って、各個人の運動実施機会に体育実技が加わるという立場からも体育実技の担う役割は大きいと考えられる。表6の授業外の運動実施の動機としては、「運動不足の解消」を挙げるものが多く「健康・体力の維持増進」と合わせると約半数となった。そして、運動意欲が高い男子では「種目の成績・技術の向上」という理由が32.9%, 女子では「仲間の人間関係」が27.7%と続き、男女で動機にも多少の違いが見られた。男女間の差としては、表7の実施種目の選択理由で「その種目をさらに伸ばす」が男子で45.1%と高く、女子では「楽しそうだったから」の比率が相対的に高いことから競技指向とレクリエーション指向の違いとして特徴づけられる。従って、運動不足や体力維持を第一には考えるものの男女では本質的に運動の指

向に差があると考えられる。

一方体育実技履修の動機としては、全般には「運動が好きだから」が第一に挙げられるものであり、続いて「体力の維持増進」である。しかし、授業外運動実施者ではそれ以外に「種目の技量・技術向上」の回答率が高くなり、非運動実施者は「運動が好きだから」が極端に減少し、女子では「体力の維持増進」が最も高くなり、運動実施者と傾向が異なる。つまり、非運動実施者にとってはやはり授業が運動不足・体力低下に対する予防策となり、運動実施者には授業はさらなる欲求充足の場と考えられる。また、実施をしない理由の第一である「時間がない」というものも、授業という枠で時間をとることで一定の解決がなされるのかも知れない。

以上のことから、やはり学生にとっても運動実施の動機には「運動不足」「体力維持」等への予防対策が第一義的なものであり、その内容は技術指向、種目興味、友人関係を広げる場といった目的によって選択され、特に男女では異なるものであると考えられた。従って、全学生に享受させられない選択という新システムとなった今後、本塾のような総合大学における体育実技は、体力・健康問題を押さえつつ、競技指向とレクリエーション指向といった幅の広い対応のできる内容であることが望ましいと考える。

ま と め

カリキュラム改訂後の体育実技履修者の運動実施の実態についてアンケート調査をした。分析の対象者は男子1327名、女子393名であった。その結果、必修時に全学的に実施された同様の調査に比較して、選択移行後の履修者は、運動経験及び運動実施の比率が高かった。しかしながら、1年時から2年時にかけて運動の実施率は男子で8.3%、女子で9.8%低下していた。運動の実施動機、種目選択理由、体育実技履修動機には男女別の特徴があり、男子は競技指向、女子ではレクリエーション指向の要素で回答率が高かった。また、実技履修動機については授業外の運動実施者と非実施者においても違いがみられ、非実施者は体力維持に関する動機が強かった。今後の体育実技は運動機会の不足する学生の、体力、競技、レクリエーションといった多様なニーズに対応できる内容であることが必要であると考えられた。

参考文献

- 1) 村山光義・石手靖・佐々木玲子・松田雅之・近藤明彦（1994）慶應義塾体力標準値について——必修体育時の継続測定の資料から——．慶應義塾大学体育研究所紀要 第34巻：p 91-102.
- 2) 村山光義・田中伸明（1995）慶應義塾大学学生の運動経験・実施の実態調査——必修体育時の入学生の資料から——．慶應義塾大学体育研究所紀要 第35巻：p 69-81.